魔法少女まどか☆マギカ ワールドオブメシア

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女まどか☆マギカ　ワールドオブメシア

【Ｎコード】
Ｎ９７３３Ｚ

【作者名】
ハジケ

【あらすじ】
これはとある世界の一人の青年が魔法少女まどか☆マギカの世界に行くお話です。

タイトルは変更しました。

青年と少女の出会い（前書き）

作者「自分の考えたオリキャラ剣舞がまどかマギカの世界に行ったらと言う話です。」

青年と少女の出会い

ここはとある世界…この世界に居る超天才科学者の所に一人の青年…剣舞が来ていた。

「チャタイン？何のようだよ？」

「実は君に調整が終わった次元転送装置の実験台になってほしいんだ。」

超天才科学者のチャタインはメガネをクイッと上げながらそう言うが。

「嫌だよ。」

剣舞にあっさり断られてしまった。
チャタインは剣舞に断る理由を聞く。

「何故嫌なんだい？」

「だってチャタインの装置の実験台って大抵ろくな目にあわないって聞くし。」

剣舞にそう言われるとチャタインはニタァ…と笑いながら剣舞にこう言った。

「大丈夫、今回は発信器も着けるから。」

「んー……じゃ、いっか。」

発信器をつけると聞いて剣舞はあっさり実験台になる事を了承した。

「よしじゃあ発信器をつけるよ。」

「おう。」

チャタインに小型の発信器をつけられる剣舞。
発信器をつけ終わるとチャタインは剣舞に次元転送装置に乗るように言った。

「じゃ、早速乗ってよ。」

「分かったぜ。」

剣舞は次元転送装置の上にチャタインに言われた通り乗った。
すると…

バチッ、バチッ

「チャタイン…変な音が聞こえんだけど?」

「…ダメか。」

「何じゃそりゃあーー!?」

ブゥゥゥウン…。

「まっ、発信器があるから探せるし別にいいや。」

○●○●

金髪の中学生…巴マミは驚いていた。
…急に目の前に現れた剣舞に対して。

「あ、あの…貴方は一体…？」

グゥゥ～

「腹減ったな…。」

「……じゃあ家でご飯を食べますか？」

巴マミは何故自分がこんな事を言ったかは分からないがとりあえず
目の前の青年…剣舞が本当に腹を空かせた顔をしていたからだろう。

○●○●

「いやー、マジでありがたいぜ。飯を食わせてもらってよ。」

「いえ…私も誰かと一緒に食事が出来て楽しかったですから…。」

剣舞はそれを聞くとキョトンとした顔でマミに聞いた。

「何だお前、友だちいねぇのか？」

剣舞のその言葉はマミの胸にグサッと刺さった。
確かに自分が誰かと一緒に食事を出来て楽しいとか言えばそう相手は考えるだろうが。

「じゃあ俺が友だちになってやるよ。」

「えっ！？」

彼は今なんて言った…自分と友だちになる…と言ったのかと巴マミは耳を疑う。

「いきなり会った人と友だちになるなんておかしいですよ？」

「じゃあ、お前がいきなり会った俺に飯を食わせたのもおかしいんじゃねぇか？」

マミの言葉に剣舞がそう言い返すとこの場の空気がシーン…っとなったあと剣舞とマミは笑いだした。

「あはははっ！どっちもどっちじゃねぇかよ。」

「うふふふっ！そうですね…あと私はお前じゃなくて巴マミです。」

「じゃ、マミって呼ぶな。」

剣舞は軽くそう言った。すると巴マミは顔を赤くする。

「男の子が女の子を名前で呼び捨てにするのは友だちって言うより

も恋人だと思いますけど…？」

「うーん…でも俺は基本、人の事は名前呼びで呼び捨てだしな…。」

剣舞がそう唸りながら言うとマミはクスッと笑いながら剣舞にこう言った。

「別に名前呼びでいいですよ？…その変わり私も貴方の事を呼び捨てにしますよ。…えっと貴方の名前は？」

「俺は刀刃剣舞って言う名前だぜ。」

「変わった名前ですね。あっ、気にさわったらすみません…。」

マミは剣舞の名前が変わってるとつい言ってしまったが、その事を謝る。

だが剣舞は笑いながらこう言った。

「おう、変わった名前だろ。でも格好悪くはないだろ？」

「確かにそうですね…ふふっ。…所で剣舞が持ってるその刀は玩具ですか？」

剣舞はそう聞かれるとこう答えた。

「本物だけど？」

「銃刀法違反ですよ！？」

マミは剣舞に対してそう言った。確かに正論だ。

そして剣舞は俺の世界じゃねぇから本物とか言ったらダメだったかと思ったが既に遅い。

「あー…ちょっと警察とかに言うのは待ってくれ、事情を話すからさ。」

「事情…？」

剣舞は自分の世界の事や自分が何故急にマミの目の前き現れたのかを話した。
するとマミは少し疑いながら剣舞に聞く。

「本当ですか…？異世界から来たなんて…。」

「うん、マジだぜ。」

剣舞は迷いのない澄んだ目でマミの目を見つめながらそう言った。
剣舞に目を見つめられたのでマミは顔を赤くする。

「信じるわ、友だちだもの。」

「ホントか！？サンキューな、マミ。」

剣舞はマミの手を握りながらマミが自分を信じてくれた事を喜ぶ。

「剣舞、手…。」

「なんだよ？マミ。」

マミは剣舞に手を握られた事でドキドキするが、剣舞はそんなマミ

の気持ちなど知るよしもなかった。

「そうだ、マミさすがに家に泊まるのは悪ぃから俺、今夜野宿する場所探してくるわ。」

「親に許可をもらってくるからいいわよ剣舞。」

「ホントか！？…でもやっぱりなー…よし俺、やっぱ野宿にするわ。」

剣舞がそう言うとマミは暗い顔をした。

「友だちがここまで言ってるのに断るの…？」

「急にそんな暗い顔してどうしたんだよ？…って何で急に泣き出すんだ！？分かったよ、家に泊まるから泣き止んでくれ！？」

剣舞が必死にそう言うとマミはさっきまでの泣き顔が嘘であったように笑顔になった。

「じゃあ、決まりね。剣舞は私の部屋で寝ていいわよ。」

「嘘泣だったのかよ！？。」

こうして剣舞はマミの家に泊まる事になった。

○●○●

夜…マミの部屋で剣舞とマミは同じベットで寝ていた。
最初は剣舞は『床で寝るよ』と言っていたがマミが『床はダメよ固いから、ベットの方が柔らかくて気持ちいいでしょ？』と言ったからだ。

「人が側にいるのって落ち着くな…。」

マミは剣舞が隣に寝ている事で安堵を得ていた。
一方剣舞は。

「スー……スー…。」

気持ち良さそうにグッスリと寝ていた、マミはそれを見て少し不機嫌になる。

「こんなかわいい女の子が隣に居て剣舞は何で緊張しないんだろ…もっとくっついちゃえ！」

マミは自分の体を剣舞に密着させる。
そうすれば剣舞は少しは自分を意識するのでは？と思ったからだ。
マミが体を密着させると剣舞はマミを抱きしめてきた。

「えっ…！？」

「兄ちゃんの布団にまた入ってきたのか…仕方ないなぁ…一緒に寝てやるぞ……スー…。」

どうやら夢を見てマミを抱きしめたようだ。
剣舞に抱きしめられたマミは顔を真っ赤にして気絶してしまった。

しかし…剣舞はそんなマミの様子を知るよしもないのでした。

青年と少女の出会い（後書き）

作者「この話しについて感想くるかな？」

キレる剣舞（前書き）

作者「青年と少女の出会いの続きです！」

キレる剣舞

次元転送装置による事故で別世界に飛ばされた青年、剣舞は偶然出会った巴マミの家で世話になっていた。

そして現在、彼は何かを作っていた。

「うーんと…よし出来た！」

剣舞は自分の作っている物が完成すると、学校に行こうとし玄関にいるマミの元に向かう。

「マミ、これやるよ。」

剣舞はマミに丸くてかわいい見た目の動物の木彫りの人形を渡した。

「これは…？」

「世話になってるからなプレゼントだ。それともやっぱり木彫りの人形なんかじゃ嬉しくねぇかな？」

剣舞がそう言うとマミは剣舞から渡された人形をギュッと握りしめ首を横に振る。

「ううん…とっても嬉しいよ、ありがとう剣舞。」

「そっか、よかったぜ！学校に気をつけて行けよ、マミ。」

「うん、行ってくるね、剣舞。」

マミは剣舞に見送られ学校に向かうのだった。

マミが学校に行くのを見たあと剣舞はある事を考えていた。

「マミ、両親に俺が泊まる許可を取るって言ってたけどこの家にはいないよな…両親は別の所に住んでて電話で許可取ったんかなぁ？まっ、いっか。」

マミにはマミの事情があると思い、深くは詮索しない剣舞であった。

○●○●

場所は変わってマミの通う学校。

マミは休み時間に剣舞から貰った人形を見つめ笑顔になっていた。

人形を貰った事が嬉しかったのだろう…厳密に言えば誰かからプレゼントを貰った事がマミは嬉しいのだが。

「何ニヤニヤしてんのよ？」

マミが人形を見つめているとクラスの女子の一人がマミに話しかけてきた。

「えっ、いや別に…。」

「何その人形？ちょっと貸しなさいよ。」

クラスの女子はマミからそう言って人形を奪い取った。

「あっ！？返して！」

「こんな人形の何処がいいのかしら…こうしちゃえ！」

人形を奪い取ったクラスの女子は人形を床に落とすと人形を踏みつけた。

「止めてよ！？その人形は大切な物なの！」

「大切な物ねぇ…そう聞くと壊したくなったわ！」

クラスの女子はそう言うと人形を連続で踏みつけ壊した。

マミはそれを見て絶望にまみれた表情をしたあと急に怒りが込み上げ人形を壊した女子を突き飛ばす。

「痛っ…何すんのよ！もう怒ったわ…あんたちょっとついてきなさい。」

「えっ…！？」

マミは人形を壊した女子にある場所に無理矢理連れて行かれる。

女子が集めた複数の男子とともに…。

○●○●

人が寄り付かない教室…マミは人形を壊した女子が集めた複数の男子に囲まれていた。

「本当にこいつ犯っちゃっていいのかよ？」

「ええ、構わないわ。」

「いい体してんなぁ…たまんねぇぜ！」

男子の一人がそう言うとマミは体をビクッと震わせる。

自分がこれから何をされるのか恐怖しているのだ。

「天涯孤独の奴がどうなろうと誰も悲しまないわ、さあ犯ってしまいなさい。」

人形を壊した女子がそう言うと男子の一人はマミを押し倒し覆い被さる。

「へっへっへ…まずは俺からだ！」

（助けて…剣舞くん。）

届くはずがない…そう思ってはいたががマミは剣舞に助けを求めた。

しかし届くはずがないと思っていたマミの思いとは裏腹に…

「お前らマミに何してんの？あとマミ、お前俺に助けを求めたか？」
マミの思いは届き剣舞はマミを助けにきた。
人形を壊した女子とその女子に集められた男子達は剣舞が急に現れた事に驚いていた。
「何処から来たのよあんた！？」
「瞬間移動でここに来たけど？それよりも…。」
剣舞はマミの上に覆い被さっている男子に近づき。
「マミ、嫌がってんじゃねぇか…離れろ。」
剣舞は急に柔らかい雰囲気から鋭くピリピリした雰囲気になりマミに覆い被さっている男子にそう言った。
だが男子はヘラヘラしながら剣舞に言葉を返した。
「離れろって言われて離れると思ってのかよ？」
男子がそう言うと剣舞は鋭い目付きになりこう言った。
「もう一度だけ言う…離れろ。」
「嫌だ…ねっ！？」
嫌だと言った瞬間、男子の顔面に剣舞の拳がめり込んでいた。

そして男子はそのままふき飛ぶ。

「な、何なのよあんた！？」

女子にそう言われると剣舞は、ハッキリとこう答えた。

「マミの友だちだ！」

「天涯孤独のこいつに友だちがいたの！？」

剣舞は天涯孤独と言う言葉を聞くとピクッと反応する。

「天涯孤独…？」

「こいつは事故で両親を無くしてんのよ！しかも自分だけ生き残ってんのよ、笑えるわ！」

剣舞は女子の言葉に怒りを覚えつつもマミの方を振り向いた。

「マミ…じゃあ、あの時の両親に許可を取るってのは？」

「ごめんなさい…剣舞に余計な気を使わせたくなくて…。」

マミが申し訳なさそうにそう言うと剣舞はマミの頭の上に手をポンッと乗せる。

「謝んなくていい…だって俺に気を使わせたくなくて嘘をついたんだろ？…俺の方こそマミに気を使わせてごめんな。」

剣舞はそう言ってマミの頭をわしゃわしゃと撫でた。

マミは頭を撫でられて思わず赤面していた。

「で？お前らはマミに何をしようとしていた…。」

剣舞は威圧を漂わせながら女子と男子達にそう言った。

すると女子は剣舞の威圧に若干怯えながらもこう言った。

「そいつが人形を見てニヤニヤしてムカついたから男子達を使ってメチャクチャにしてやろうと思ったのよ！！」

女子のその言葉を聞くと剣舞の立っている地面にヒビが入り、破片が宙にと浮かぶ。

「ただ…それだけで…？それだけの理由でマミを苛めたのかあ！！！」

剣舞がそう怒鳴ると部屋中に細かなヒビが入る。

女子と男子達は何が起こった？と辺りを見回していた。

「何かよく分からないけど、あんたもムカつくわ！あんた達まずは、あいつをどうにかしなさい！」

女子がそう言うと男子達は剣舞を囲む。

「この人数に勝てると思ってんの？どうやってここに来たか、分からねぇけどその方法を瞬間移動とかイタイ事を言ってる兄ちゃんよ。

」

「俺らより年上っぽいのにマジ、中二病じゃね？」

「俺はボクシングやってるんだぜぇ？」

男子達は色々剣舞に向かって言うが剣舞は男子達の言葉に耳を貸さず、主犯格の女子を睨みつける。

「無視してんじゃねぇ！」

男子の一人がそう言って剣舞に殴りかかるが剣舞はそれを軽くかわし顎（あご）に掌底を食らわせた、男子はグラッと揺れると気絶する。

「お、俺はボクシングを…」

男子の一人が何か言いおえる前に剣舞は見事なストレートをその男子に叩き込む。

「ボクシングをやってるわりにゃ構えがなってないな。」

「何だよこいつ…うわぁあ！！」

男子の一人はナイフを取りだし剣舞に突き刺そうとした、…だが。

「切れ味の良くない、ナイフだな。」

「えっ…！！？」

ナイフは剣舞に突き刺さらずに折れてしまっていた。

男子はそれを見ると怯えた表情をして部屋から逃げ出そうとする。
しかし剣舞はそれを見ると手を男子の向かう方向のやや先に向け。
「はぁっ！」
軽く気を放ち牽制した。
男子は自分の目の前の地面がヒビだらけになった事に怯え地面に尻餅をつき、ションベンを漏らす。
「他の奴らもかかってくんのか？」
剣舞が残った、男子達にそう言うと男子達は下を向き、ただ震えていた。
それを見ると主犯格の女子に剣舞は近づいていく。
「ご、ごめんなさい！もうしませんから！」
女子は剣舞に向かって謝るが剣舞は怒りの表情を変えずに女子に近づく。
「謝るのは俺にじゃねぇ…マミにだろうが！」
剣舞はそう言うと拳を振り上げる、そしてその拳を…主犯格の女子にではなく女子のすぐ後ろの壁に叩きつけた。
すると壁は粉々に消し飛ぶ。
それを見た女子は、歯をガチガチとさせながら怯え地面に腰を落とした。

「お前なんか殴る価値もねぇよ…。マミ、帰んぞ。」

剣舞はそう言うとマミに近づき手を引き起き上がらせようとするが、マミは恐怖で腰が抜けている為、立ち上がれない。

剣舞はそれに気づくとマミをお姫様抱っこと言う形で抱き抱えた。

「えっ！？ちょっ…剣舞…」

マミが何かを言おうとする前に剣舞は額に指をあて、瞬間移動をする。

○●○●

瞬間移動した剣舞はマミの住んでいる場所の近くに移動していた。

「悪ぃな、マミ。俺の瞬間移動は誰かの気を感じて移動するから家の近くまでしか来れねぇんだ。」

「剣舞…貴方って凄いわね。」

瞬間移動をした剣舞に対してマミは思わずそう言ったが、当の剣舞はキョトンとしていた。

「へっ？何が？」

「…それよりも私、まだ学校終わってなかったんだけど…。」

マミがそう言うと剣舞は焦った顔をして慌てた。

「えっ！？わ、悪ぃ…マミ。」

剣舞が謝るとマミはクスッと笑った。

「もういいよ、今日は学校サボるから。」

「俺も学校、時々サボってたな～。」

マミがサボると言うと剣舞は自分も学校を時々サボってた事を思い返してた。

マミはそんな剣舞を見てこう言った。

「私はそんなにサボってないですよ？」

「確かにマミはあんまサボりそうにねぇな、ははっ！」

剣舞はマミにそう言われると笑いながら言葉を返した。

このあと二人は喋りながら家へと帰路を歩む…そしてマミの中に剣舞に対する特別な感情が芽生えていたのだった…。

キャラ紹介（前書き）

作者「キャラ紹介です。？？？は終盤に出るかもしれません。」

キャラ紹介

刀刃剣舞

異世界から魔法少女まどか☆マギカの世界からやって来た青年。
彼の世界は色々な世界と繋がって成り立っている。
彼の見た目は茶髪の少しツンとした髪に整った顔。
服装は、白のシャツに灰色の革ジャケットに黒い革のズボン。
身長は１７９ｃｍ
戦闘能力は非常に高く、技や特殊能力も持っている。
性格はフレンドリーで明るい親しみやすい性格。
ただし誰かの為にキレると言葉が少し鋭くなる。

???

終盤で出るかも？たこ焼き屋を営んでおり、彼の作るたこ焼きは絶品。
変身型の宇宙人である。
見た目はハゲ頭のいかついオッサン。
因みに母親はでべそ。

キャラ紹介（後書き）

作者「？？？の特徴はある人と似てるかも…。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9733z/

魔法少女まどか☆マギカ ワールドオブメシア

2012年1月5日19時46分発行